



「きっとこっちだよ！！」

コト

目的地へと走るコート。

しかしいくら探せども、そこでプレゼントを見つけることは出来なかった。



コト

「ぐぬぬ……」



フド

「降参だね……アンバーおねえさんに教えてもらおう」

フドに連れられ、本部へと向かうコート。



アンバー

「あばばばば」

探し回っている間に祭りも終盤。

アンバーの泥酔も最高潮に達していた。

ブルーシートの中心で横たわる彼女は、まるで死んでいるようで。

……とっても愚かだった。



コト

「こんな人に頭を下げたくないなあ……ん？」

ふと。違和感。

アンバーが倒れているブルーシートになにか……。

隠しと言っていた、プレゼントと思わしきものが置いてあるではないか！

隠しと言っていた段階で酔っていたアンバー。プレゼント。



フド

「……この人、やってないかなあ」



コト

「……もらっちゃおうか」

突然のことに冷や水を浴びせられた二人は、アンバーを放置してお祭り会場を後にした。



フド

「ぜったい途中でお酒もらってああなったよね」



コト

「ほんとうにあのひとはバカ酒飲み」

ふたりはすっかり暗<sup>くら</sup>くなった道<sup>みち</sup>を歩<sup>ある</sup>く。

街灯<sup>がいとう</sup>に照<sup>て</sup>らされて見え隠<sup>みかく</sup>れするフードの表<sup>ひょうじょう</sup>情<sup>み</sup>を見<sup>み</sup>つめながら、コートも歩<sup>ほ</sup>を進<sup>すす</sup>める。



「今回のプレゼントはなんだったんだろう」



「せっかくだし帰<sup>かえ</sup>るまえに開<sup>あ</sup>けちゃう？」

はたと、街灯<sup>がいとう</sup>の前<sup>まえ</sup>で立<sup>た</sup>ち止<sup>と</sup>まる。

ぺりぺりと包装<sup>ほうそう</sup>を開<sup>あ</sup>けるとそこには絵本<sup>えほん</sup>のようなものが入<sup>はい</sup>っていた。



「なぜ？」



「タイトルは『ぼろ布<sup>ぬの</sup>のハンス』だって」



「作者欄<sup>さくしやらん</sup>は……書<sup>か</sup>いてないね、まさかアンバーおねえさんの手<sup>て</sup>作<sup>つく</sup>りだったり？」

ぺらり。

### 『ぼろ布<sup>ぬの</sup>のハンス』

あるところにとってもポロポロなお姫様<sup>ひめさま</sup>がいました。

なんたって従者<sup>じゅうしゃ</sup>に裏切<sup>うらさ</sup>られて川<sup>かわ</sup>に突<sup>つ</sup>き落<sup>お</sup>とされてしまったのですから。

オシャレなドレスはびしょぬれ、高<sup>たか</sup>い靴<sup>くつ</sup>はヒールが折<sup>お</sup>れて泥<sup>どろ</sup>まみれ。

綺麗<sup>きれ</sup>い顔<sup>かお</sup>だって濡<sup>ぬ</sup>れていましたが、そこに涙<sup>なみだ</sup>はありません。

お姫様<sup>ひめさま</sup>は川<sup>かわ</sup>から出<sup>で</sup>ると濡<sup>ぬ</sup>れた服<sup>ふく</sup>を絞<sup>しぼ</sup>って自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の影<sup>かげ</sup>に被<sup>かぶ</sup>せ、こ<sup>い</sup>う言<sup>い</sup>いました。

「あなたも寒<sup>さむ</sup>かったでしょう？ さあ、温<sup>あたた</sup>まりなさいな」

彼女<sup>かのじょ</sup>には友<sup>とも</sup>がおりました。

その友<sup>とも</sup>は喋<sup>しゃべ</sup>れず— 姿<sup>すがた</sup>も誰<sup>だれ</sup>にも見<sup>み</sup>えませんが—。

いつでも、いつだって、自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の側<sup>そば</sup>にいてくれました。

彼女<sup>かのじょ</sup>は友<sup>とも</sup>達<sup>だち</sup>がいればどんな困<sup>こん</sup>難<sup>なん</sup>にだ<sup>た</sup>って立<sup>た</sup>ち向<sup>む</sup>かうことができました。

神<sup>かみ</sup>様<sup>さま</sup>が見<sup>み</sup>てなくたって、光<sup>ひかり</sup>に照<sup>て</sup>らされなくたって。

いつでも、側<sup>そば</sup>にいてくれました。



「……どうい<sup>い</sup>う意<sup>い</sup>味<sup>み</sup>なんだろう」





「複雑な文章なんて大抵中身が薄いことのカムフラージュだよ！」



「そんなこともないと思うけどなあ……」

今からアンバーおねえさんに意味を聞きに戻る気にもなれず、  
再び歩き出した二人はすぐに立ち止まった。  
目の前に立ち並ぶ沢山の街灯が坂を照らしている。  
この坂を登ればコートの家、下ればフードの家だ。



「あ、もう着いちゃったか」



「うん！明日は始業式だから寝坊しないようにね！」

コートの言葉にぴくりと反応するフード。



「あ、まだ上履き洗ってないや」



「乾かす時間が絶望的じゃん」



「急いでブラシしないと……」

慌てて取り乱すフードをほほえましく思いながら、コートは坂に足をかけた。



「また明日！」



「来年も3人でお祭りに行こうね！」

その声に振り返ると、急いで帰ろうとするフードの後ろ姿は既に小さくなっていた。  
街灯の灯りに照らされながら、私は消えていくフードを見送った。

今日のお祭り、楽しかったな。  
家に帰った私は微笑みながら、寝る支度をするのであった。

夜が更けていく……。